

日本語教育振興会刊

『ハナシコトバ』における仮名遣

— 日本語教科用図書調査会における

審議経過をめぐって—

鈴木 泰

1 発音符号と仮名遣

『ハナシコトバ』の仮名遣が問題になったのは、第二回の総会においてである。その問題点は、原案において、第一、二巻では、本文を発音式の表記にしているのに対して、第三巻においては、日本の小学校の国語読本と同じ歴史的仮名遣を採用し、かたわらに表音式表記を注記するという体裁をとっていたことであつた。これに対して橋本進吉は次のような異議をとなえている。

音声言語ヲ教ヘル為メニハ純粹ニ発音ヲ表ハス方法ヲ取ルノガ適當デアツテ、仮名遣ハ文字言語ニ限ラルベキデアル。…議案ノ卷三ニ歴史的仮名遣ヲ本文ニ用ヒテアルノハ不賛成デアル。音声言語ヲ教ヘルノナラ卷一カラ卷三マデ一貫シテ発音符号ヲ用ヒルノガ適當デアルト考ヘル。(日本語教科用図書調査会第二回総会会議要録七〇—一頁)

橋本進吉がこれ以前に仮名遣に言及した昭和八年の論文「仮名遣について」(三六—七頁)では、「仮名の用ゐ方について疑問が起つた場合に、之を解決する方法としては、いろいろのものが」あるとして、第一に、「おなじ音に対するいくつかの書き方をすべて正しいもの」とする方法、第二に、「語の如何に係はらず同一の音は同一の仮名で書き表はす」という方法(表音式仮名遣)、第三に、「同じ音であれば、いつも同じ仮名で書くのではなく、これまで世間に用ゐられて来た伝統的な、根拠のある書き方を正しいと認める」という方法(歴史的仮名遣)の三種があるとしたのである。しかし、実際には橋本はどのような場合にどの方法をもちいるかについて具体的にはしめていない。本調査会における発言はそれをはじめて明らかにしたものとして意味があるといえよう。つまり、仮名は文字ではなく、あくまでも表音符号という資格にたつものとしてであるが、音声言語の習得めざす日本語学習者の教材においては表音的仮名遣を適当なものとみとめたのである。したがって、日本語教科書の表記において、第一、二巻では表音式を採用し、第三巻で歴史的仮名遣にしようという提案は矛盾であると批判したのである。神保格もすでに第一回の国語対策協議会において、

其仮名を以て発音の符号としますならば、其仮名は二種類の使ひ方をされることになるのであります、一つは今迄伝統的習慣的に伝はつて来た仮名の使ひ方、それが歴史的仮名遣でありま

す、一方は新たに約束で決める発音の符号として用ゐるもの、此二つが出来る訳であります、此二つは原則として十分に区別して考へるべきものであると私は考へて居ります、(国語対策協議会第一回報告・三七一頁)

といつており、ここでも橋本の説に賛同したので、その処置は、主査委員会のあずけとなつた。その結果、三巻とも発音式が採用されることとなり^(注¹)、本書の書名も、音声言語のみを教えようとしているのだからというので、『初歩日本語』から『ハナシコトバ』に変更されることになった。また、採用されている仮名は書きことばにもちいることのできる仮名遣ではないことを明らかにするため、巻末には、その仮名は発音符号としてもちいられたものであることを注記することになった。^(注²)

これは、橋本が表音式仮名遣といわれるものを仮名遣とはみとめず、仮名遣としては歴史的仮名遣のみをみとめる立場にたつことから、このような結果になつたものと思われ、本教科書に対する橋本の態度は、橋本の仮名遣論が実際にどのように機能したかを知る、貴重な事例ということになるだろう。

この片仮名を発音符号としてもちいるという方針は、日本語表記として画期的なものであつたが、実はこのことがもととなり『ハナシコトバ』は教科書として短命におわることになる。山下秀雄一九

九八一「第二回復刻の原本一一冊と復刻版」によれば、『ハナシコトバ』は大変な需要があり、四五万部も刊行されるのであるが、わずか三年後の一九四三年七月には絶版がきまるのである。その理由は、「現地の声として、圧倒的に多いのがその表記の問題であつた。日本語コースとしては、『ハナシコトバ』上中を習得すれば『日本語読本』巻一に進むことになつており、「発音符号」としてのカタカナ表記から一転して歴史的仮名遣いに入つていく難しさを訴える教師が多かつたのである」(山下秀雄VI「日本語教育振興会と時代的背景」『言語文化研究所日本語教育資料叢書・復刻シリーズ第2回・日本語教育振興会刊行図書 一九四一〜五』一〇〇頁)というものであつた。

表音式仮名遣を書きことばの正書法とみとめないということは、日本語に関して、一方では母語話者にとつての日本精神とはいわなまでも日本の伝統をつたえるものとしての国語を保持しておき、一方では東亜の諸民族にとつての開かれた共通語としておこうという異なつたスタンスでのぞもうとしていたということであろう。安田敏朗一九九七の、

日本語が「国際化」可能かどうかは、「国語」なり「日本語」なりの背負つてきた意味を考えた上で決めていくことなのではないだろうか。(京都大学人文科学研究所『人文学報』八〇・九九頁)

というような発言も、現代日本において、看護職や介護職をめざす外国人の国家試験受験において行われるようになった振り仮名をつけるなどの特別な表記上の配慮というようなものも、母語話者の国語と区別され、本来の正書法ではないとみなされている限りは許されるというのならば、かつての大東亜共栄圏時代の仮名遣のダブルスタンダードと同じものではないかという疑いからなされていると考えることができる。

2 昭和四年と七年の初期橋本文法と表記観

橋本進吉が歴史的仮名遣しかみとめないという立場は、正書法は一つでなければならぬという信念にもとづいたものであることは、次のような橋本の発言からもあきらかである。

同じ語は何時も同じ文字であられるのが理想的である。仮名遣は、かやうな理念の下に起つた、文字言語に於ける仮名の用法上のきまりであつて、同じ語は誰が書いても同じ字で書くやうにさせる事を目標としたものである。たとひ実際に於ては十分厳格に守られない事があるとしても、仮名遣は少くとも右のやうな事を目的として、そのきまりを、言語を文字に書く時の正式な書き方として、社会一般に行はうとするものである。(「国語の表音符号と仮名遣」〔橋本進吉博士著作集三・五九頁〕)

そして、その仮名遣は伝統的な歴史的仮名遣しかないと橋本が考えていたことは彼の上代語の研究からも当然のことと思われる。しかし、初期橋本文法の講義筆記にみる限りでは、正書法として表音式仮名遣を採用することに必ずしも否定的ではなかったようにみられる。それは、所謂未来形のあつかいに関する次のような説明からうかがうことができる。

次ニ口語ノ四段活用ノ動詞ノ所謂未来形(書かう 読まう、等)

ハ発音カラミルト お ノ段ノ長音ニ発音スル。ソノ発音ヲ標準ニスルトコレマデ認メラレタドノ活用形ニモ入ラヌカラ、更ニ一段ヲ加ヘルベキデアルト云フ説ガアル。

コレニ就イテモ二ツノ取扱ヒ方ガ可能デアル。一ツハ

書こ 読も 取る

ノ如ク短イ音ノ形ヲタテテ、所謂未来形ハコレニ う ガツイタモノデアルトスルモノデアリ、他ノ一ツハ 書こう、読もう、取ろう 全体ヲ一ツノ活用形トスルノデアル。(「国語法概説二」六)

そして、次のようにつけくわえているのは、この表記の変更が、未来形の表記にのみかわるものではなく、仮名遣全体の変更にみかわざるをえないものと考えていたことをしめすものと思われる。

若シ発音主義ヲ徹底サセヨウトスルナラバ先ヅ五十音図ヲソノ
ママニシテオクワケニハイカズコレヲ現代ノ発音ノ通りニ直サ
ナケレバナラス。即チ

わ行 わ い う え お

だ行 だ じ ず ぞ

或ハダ行ヲ (ざ ぢ づ ぜ ぞ)

は行 わ い う え お (国語法概説二一七)

しかし、別のところで次のようにのべていることからすれば、発音
式仮名遣は便宜の手段としてはゆるされるとしても、全体として発
音式仮名遣に移行するのは得策ではないともかんがえていたことが
知られる。

コノ様ナ取扱方ハ時ニ困難アルガ、便宜主義カラ云ヘバ分解シ
ナイデソノ俣出ス事ガ便利ノ様ダ。カ様ナ発音主義ニヨル事ハ
必ズシモ悪イ事デハナイガ、之迄ノ説明ノ仕方トハ余程違ヒ「発
音主義ニヨルト」ソノ外ノ部分ヲ改メネバナラス事ハミトメネ
バナラス。(日本文法論一六六)

これは、昭和初期の文法論における活用形の表記のとりあつかい
においては、橋本自身の考えのなかで、仮名遣論とのすりあわせは
まだ十分に行われていなかったということであろう。

しかし、日本語教科用図書調査会以降の橋本の見解は、次にみら
れるように、日本語学習者むけに、仮名遣ではなく、補助的な音声
符号として発音表記をもちいることに問題はないとする点では一貫
していたようである。

音声言語は音声を唯一の表現手段とするものである故に、之を
全然未知のものに教へる場合にも、その音声は實際耳に聞える
音声による外方法が無いにしても、表音符号を用ゐて音声を目
に見える形に代置して示す事は實際上有益であつて効果多い方
法である(「国語の表音符号と仮名遣」「橋本進吉博士著作集
三・六四頁」)

参考文献

- 鈴木泰(二〇一二、一三)「橋本進吉の講義『国語法概論』の筆記」
(1)(2)『専修大学人文科学研究所月報』二六〇、二六四号
鈴木泰(二〇一五)「増淵恒吉教授による橋本進吉の講義『日本文
法論』筆記」『専修国文』九七号
橋本進吉(一九三三)「仮名遣について」日本放送出版協会『こと
ばの講座』「橋本進吉博士著作集三」
橋本進吉(一九四〇)「国語の表音符号と仮名遣」『国語と国文学』
一七―二二「橋本進吉博士著作集三」
安田 敏朗(一九九七)『『国語』・『日本語』・『東亜共通語』―帝

国日本の言語編成・試論―』『人文学報』第八〇号、京都大学人文科学研究所

山下秀雄一九九八Ⅰ「第二回復刻の原本一一冊と復刻版」、一九九八Ⅵ「日本語教育振興会と時代的背景」『言語文化研究所日本語教育資料叢書・復刻シリーズ第2回・日本語教育振興会刊行図書一九四一―五』

文化庁（二〇〇五）「国語施策年表」「国語施策百年史」、文化庁

（注1）ハナシコトバ下の表記は以下の写真のように改訂された。

「イマワ ヤマナカ、
イマワ ハマ、
イマワ テッキョー
ワタルゾト、
オモー マモ ナク、
トンネルノ
ヤミオ トーッテ
ヒロノハラ。」

(注2) 『ハナシコトバ』の「あとがき」につぎのようにある。

一、本書は、日本語の読み書きを教へる読本ではなく、専ら耳に訴へる話言葉の学習を目的とするものであるから、かなを発音符号として使用した。これは、音声を唯一の表現手段とする話言葉の学習を正しく指導するために必要な手段である。随つて、日本語を正式に文字に書く場合のかなづかひとは全然別のものである。